

Interview

常にメッセージを発し続ける、現代最高のメゾソプラノ

# ジョイス・デイドナート、自らについて語る

取材・文中 東生  
Text: Shinobu Nishizawa

ジョイス・デイドナートが、いまもつと輝いているメゾソプラノ歌手のひとりであることに異論はないだろう。オペラでの活躍以外にも、「戦争と平和」と題したコンサートにおいて、平和のためのメッセージを発信したりと、その活動はオペラ歌手の枠を超え、ひとりのアーティストとしての動向が世界の注目を浴びている。デイドナートは2月、バイエルン州立歌劇場で初めてロッシーニ《セミラーミデ》のタイトルロールを歌って絶賛を浴びた。このことは先月号の100ページに掲載されたレポートで紹介したが、そのデイドナートへのインタビューをミュンヘンで試みた。

## 下積み時代があったおかげ

バイエルン州立歌劇場で、初役とは思えない圧巻のセミラーミデ（ロッシーニのオペラ、《セミラーミデ》のタイトルロール）を歌い演じたジョイス・デイドナートは、ミュンヘンの老舗百貨店Beyersdorfでの公開インタビュー&サイン会に出演し、その後、20分個別にインタビュー

次の夢は、「戦争と平和」ツアーを  
大好きな日本で行うことです

を受けてくれることが前日に決まった。

しかし当日は、長蛇の列をなすファン一人ひとりと丁寧に対話し、リムジンが迎えに来るまで残り8分という状況で、インタビューが始まった。

——《セミラーミデ》初日は、イタリア人歌手を従えてアメリカ人歌手がロッシーニのタイトルロールを理想的に体現できるという証明になりましたが、どうやってここまで到達したのですか。

デイドナート(以下D) たぶん成功に縁遠い下積み時代があったおかげです。二人の姉がピアノを弾いていたので、私も物心ついたころからピアノに触り始め、好き勝手に真似して弾いたり、合唱で歌ったりしていました。でも、ピアノリストになるには、1日に何時間も練習しなければならぬので、歌手になろうと思ったのが21歳の時でした。

良い先生には恵まれたものの、劇場では端役しか貰えませんでした。他の歌手が「23歳の若さでこの実力！」などと注目されている片隅で、「ジョイスには『フイガロの結婚』(モーツァルト)の『花娘2』を与えていれたいだろう」といった扱いでした。でも私は、自分の中に可能性を感じていたのです、その扱いに甘んじず、自分を磨くことに専念しました。外国語を学び、自分のスタイルを確立し、技術を磨きました。1997年に、初めて行った日本で開催されたブラシド・ドミンゴの国際オペラ・コンクール「オペラリア」では、第一次予選も通過できませんでした。翌年には小澤征爾さんのサイトウ・キネン・フェスティバル松本に呼ばれました。そうやってコツコツ積み重ねてここまで来たのです。

適切に表現できる声を目指す

—私は12年ほど前に、バルセロナのセウ劇場で演奏会形式のウエルディ『ナブッコ』を聴いた時から、「最高のフェネーナだ」と覚えていました。

D そんな昔を覚えていてくれたのですね! そうそう、レオ・ヌッチとマリア・グレギーナと共演し、指揮はネッロ・サ

ンテイでした。その時に、今の彼(一)とも出会いました。あの当時は、まさかここまで来られるとは思っていませんでした。

—貴女の強味は、絶対的な息のコントロールと感情表現を伴う自然なアジリタ(細かい音符で書かれた速いパッセージ)をもって、リスクをもちとわれない劇的な歌唱を聴かせてくれるところですが、どうやって実現するのですか。

D 息のコントロールはおつしやる通り、一番大切な要素です。常に呼吸と繋がっていられるように、今でも勉強しています。私は発声練習が大好きなので、セミラミデの場合は、最低20分から30分、本番の前にはしっかり練習し、息の流れをしっかりと繋げてから舞台に行きます。

アジリタは、もともと転がりやすい声を持っていたのですが、それだけでは「偽のアジリタ」だとご存知ですか。ただ転がしているだけでは、音が空洞化してしまうのです(と、歌って示す)。一つひとつの音をゆっくりつなげて歌い、豊かな響きを与えてあげてから、その速度を速めるのです。

劇的に歌う際のリスクは稽古中に限界を探ります。「ここまでなら感情を爆発させて歌っても声に支障をきたさない」という境界線が引けたら、その範囲内で本番では自由に感情を吐露するのです。

—そして、CDでは役によって声色が見事に違うのですが、どう区別するのですか。

D まずは歌詞です。言っていることを適切に表現できる声を目指し、そのパツクの和音に合う色も探します。そうして

極めていくうちに、最適な声音が生まれるのです。

微力でも光になりたい

—将来の展望は?

D 今はセミラミデと、4月にストラスプールで録音するベルリオーズ『トロイアの人々』のデイドン役デビューで頭がいっぱいですが、次の夢は、新譜CD『戦争と平和』ツアーを大好きな日本で行うことです。

このCDは当初、グルック等を収録する予定でしたが、録音まで数カ月をきつた頃、パリで同時多発テロが起き、音楽家として無力感に苛まれました。9・11の翌日もモーツァルト『コジ・ファン・トゥツテ』に出演しながら、現実との距離感に苦しんだ思いもあり、自分は音楽を通して何ができるのかと思索しているうちに、このコンセプトが神託のように浮かんできたのです。この中で一番古い曲は、400年もの

間受け継がれてきた音楽です。戦争を描き、平和に昇華して、聴く人たちに心の平安を与える、そういう音楽の力が今の世界には必要だと思ったのです。微力でもそういう光になりたいです。

—貴女は十分人を幸せにする光であり、今日も登場した時に会場がパワッと明るくポジティブな光に包まれたのですが、そのエネルギーはどこから来るのですか。

D それはとても嬉しいお言葉です。こしばらく、アメリカで起こっているニュースを読むたびに、どんどん沈んでいって不調だったのです。エネルギーは音楽から貰い、そして聴衆とエネルギーの交歓をして力を貰います。「戦争と平和」のコンサートを通して、日本の皆さんとも音楽の力を共有したいです。

途中で運転手を帰してまでインタヴューに応じ続けてくれたディーヴァは、「幸せオーラ」を発散させながら夜の街を歩いて行った。



筆者に「とっておきの写真を送るわ」と約束して送ってくれたものぞうだ。まだここでしか見られない写真?